
ペーパーの僕

沙山はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペーパーの僕

【Nコード】

N6937V

【作者名】

沙山はるか

【あらすじ】

いつも通りの朝。いつものように繰り返される日常。そんな時…
…目にした咄嗟の僕は。

（前書き）

いきなり書きたくなって、ただひたすら書いていったので、まとまりないかと思いますが、すみません。

「じゃあ 母さん、行ってきます。」

玄関口の母さんに向かって、少し振り向き、軽く手を振り返しながら言った。

そんな僕に母さんは何も言わずに、やっぱり微笑んでいるだけ。いつものように。

勤めだして3年になるこの仕事は順調。

今日も上司は仕事に追われて朝から怒鳴り散らしてうるさい。

相変わらずだな。っと目配せしながら書類の山陰に隠れながら隣のデスクの青木を呆れ顔で会話した。

その後、青木が腕時計を指差して合図する。

そうだ、今日は大事な商談があるので、早速仕度をするとい少し早めに2人で取引先に向かった。

—— なんとか上手く話はまとまった。

2人ともクタクタでも、いい疲れで会社に戻る途中だった。

「おい、今日も長かったな。俺はどうも苦手なんだよなあ。悪い人じゃないんだけど、クドくてさ話が。うちの部長のガミガミに比べたらいいけどよ。」

「青木も思うか？ 実は、僕もそう思ってたんだけど、さすがに途中で席を立てないしな。毎回どうやって切り上げようか考えてるんだ。」

とりあえず、打ち合わせや商談は午前中に設定するようにはしてるんだ。昼には抜け出せるからな。」

免許は持っているが、ペーパーな僕は電車通勤。

今日も営業車を青木が運転してくれている。

そんな中、たった今抜け出してきた取引先の営業担当の話で苦笑いしあっていた。

信号が青に変わっても、軽い事故渋滞の所為で前に進めない。

対向車のタクシーが減速しつつもスピードはかなりのまま右折してゆくのが視界に入った。

「「ああっ！！」」

—— ガシャン バキバキ キキキイイ ——

咄嗟に僕は、シートベルトを外して車外へ飛び出した。

後ろから青木の叫ぶ声がしたが、言葉なんて分からない。

何故かそのままになんて出来なかった。

1、2mは軽く飛んだであろう自転車に乗っていた彼女はグツタリとアスファルトに横たわっていた。

大きく目立った外傷はなく、呼吸もしている。どうやら気を失っているようだ。

タクシー運転手も慌てて駆けつけてきて、彼女を挟んだ状態の僕の向かい側にしゃがみこんでいた。

様子を心配そうに覗き込みながら、ケータイで自分のタクシー会社に電話して、今後の動きを説明されているようだ。

さっきから「はい。分かりました。はい。」その繰り返しだ。ホントに分かっているのだろうか。だんだん腹が立ってきた。

自分のケータイが上着のポケットで鳴る。
待受け画面に「青木」っと名前が出てきた。どうやら渋滞にはまりながらメールを送ってきた。

『なんとか部長には言っておく。済んだら会社に速攻戻って来いよ。』

救急車やパトカーが来て、事故処理を شدした。
一応その場に居合わせたので僕も事情を聞かれたが、無関係と分かるとすぐに無罪放免で拘束を解かれた。
とりあえず、路線バスに乗って会社まで戻ってきた。

——1週間後——

どう考えてもうちの会社には関係の無いような女性がやってきた。
歳や背格好は母さんと同じように感じた。あまり派手でない服装で、小奇麗にはしているが、どこか疲れたような寂しい印象のする人だった。

受付の女の子と何やら会話をして、丁寧にお辞儀をしている。

「こちらへよろしいですか。ただ今呼んで参りますので、どうぞお座りになってお待ちください。」

応接セットに接待しているのが視界の端に映り、彼女の声だけが聞こえる。

コツコツ コツコツ

だんだん受付の女の子が近づいてきた。

「中村さん。お客様がおみえですよ。　　なんだか、先日娘がお世話

になりましたので、ご挨拶に。っておっしゃってましたよ。」

その言葉でハツとした。先日事故の彼女の母親だという事に気付いたからだった。

その後、タクシー会社の人も運転手も数回見舞いに来て謝罪していたそうだ。

下手をしたらそのまま逃げられるという事だってあり得たのだから、僕が駆けつけた事でキチンと対応された。

その事に感謝しているという事だった。

彼女の容態は、足を骨折しているとはいえ、他はいたって元気だそうだ。

その母親は立ち上がって、深々と何度も頭を下げ、お礼を言って帰っていった。

今日は、定時で上がったから、見舞いでも行くかな？

外に出てみると、小雨が降っていた。

ここところ暑さが続いて、通り雨もなくってカラカラになってたから、もう少しまとまって降ったらちよいどいいかな。なんて思いながら見上げると、あまりどんよりしていない雲が薄く空に広がっていた。

あの日の彼女のグツタリとしていた 青白い顔を思い出した。

今日はどんな笑顔を向けてくれるだろう。

目を開けた彼女はどんなだろう。

そんなことを思いつつ花屋に立ち寄った。

まだ見ぬキミの笑顔を思い浮かべながら花を選ぶ

ピンクのカーネーション

カーネーションより少し濃い目のピンクのガーベラ

後はおまかせでバスケットに仕立ててもらった。

何故だかドキドキが止まらない

病院について、記憶の中の数字を辿って病室を探す。

その間中も心臓は落ち着かずに、逆にどんどん早くドキドキを繰り返しているようだ。

記憶の中の数字と名前を口の中で復唱する。

両方がピッタリと合うまで復唱は続く。

ピッタリと合うと息を呑んだ。

そしてギュッと目を閉じて、深呼吸を3回ゆっくりしてみた。
扉に手を掛けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6937v/>

ペーパーの僕

2011年10月5日15時30分発行